



# 営農NEWS



## ナシやブドウの秋季防除を必ず実施しましょう

ナシやブドウの栽培では、果実の収穫が終わった後でも、落葉するまでは、光合成産物が樹体に貯蔵養分として蓄えられる大切な時期です。このため、病害虫の発生によって早期に落葉しますと、翌年の生育に影響しますし、また、その被害部位や落葉が翌年の重要な伝染源となりますので、収穫後も適切な防除を実施することが必要です。

特に、ナシ栽培で最も問題となる黒星病は、秋になると葉裏に薄墨色のうっすらとした秋型病斑を形成し、落葉したものが翌年の伝染源となります。また、もう一つの伝染源となる芽のりん片への感染も、10～11月頃の降雨により高まる時期となるため、この時期に十分な防除を行っておく必要があります。

県病害虫防除所の調査によりますと、本年の9月中下旬現在における黒星病の葉での発生は、平年並の状況で、秋季防除を徹底するよう呼びかけています。また、ハダニ類は9月中下旬現在で、平年よりやや多い状況であったため、多発している圃場では、秋季や休眠期および翌春の防除を徹底するよう呼びかけています。

一方、ブドウ栽培では、県病害虫防除所の調査で、8月下旬現在、褐斑病、さび病の発生が平年並、べと病の発生が平年並～やや少ない状況でした。しかし、今年は7月下旬から9月にかけて、天気が曇雨天や日照不足で経過し、今後も、台風や秋雨前線の影響などで、圃場によっては病害発生に適した条件で経過すると推察されます。

これらの病害虫は被害部位や落葉などが翌年の重要な伝染源となるため、次年度の病原菌ならびに寄生密度を低下させるためにも、収穫後の耕種的や薬剤防除を徹底しておく必要があります。

なお、秋季防除の散布薬剤として、県の病害虫参考防除例によりますと、ナシではオキシラン水和剤（600倍液）、ブドウではICボルドー48Q（50倍液）またはZボルドー（800倍液、葉害軽減のためクレフノンを加用）が殺菌剤として採用されています。これと害虫防除としてナシおよびブドウとも、スミチオン水和剤 40（1,000倍液）を散布するよう指導されています。

### <防除のポイント>

- 1) 薬剤散布にあたっては、十分な薬量を丁寧に散布してください。なお、ナシでは徒長枝にも十分散布してください。圃場の周縁部など、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行うことが重要です。SS散布では散布圧を調整して、かけむらの無いように、園内を縦横に走行するよう努めてください。
- 2) 秋季防除は、15～30日間隔に2～3回実施してください。なお、秋の長雨が続けている場合は、11月の落葉前まで実施してください。
- 3) 落葉は集めて土中深く埋めるか、ロータリー耕などで土中にすき込むなどして、適切に処分します。また、園内の季節風の風下で落葉が集まる場所に、深さ30～40cmで適当な幅の溝を掘っておくと、そこに自然と集まった落葉を翌春の3月までに埋め戻しておきます。
- 4) 罹病果や枝梢、巻きつる等は、集めて適切に処分するか、土中深く埋めておきましょう。

表1 ナシ収穫後における秋季防除の主な薬剤（平成29年10月10日現在）

薬剤名	希釈倍率	使用時期 / 使用回数	対象病害虫
オキシラン水和剤	500～600倍	収穫3日前まで / 9回以内	黒星病、輪紋病など
デランフロアブル	1,000倍	収穫60日前まで / 4回以内	黒星病、輪紋病など
トレノックスフロアブル	500倍	収穫30日前まで / 5回以内	黒星病など
チオノックフロアブル		(休眠期は1回以内)	
スミチオン水和剤 40	800～1,000倍	(無袋栽培) 収穫21日前まで / 6回以内	ナシチビガ、ハマキムシ類など

表2 露地巨峰収穫後における秋季防除の主な薬剤（平成29年10月10日現在）

薬剤名	希釈倍率	使用時期 / 使用回数	対象病害虫
Zボルドー	500～800倍	- / -	べと病、褐斑病、さび病等
ICボルドー48Q	25～50倍	- / -	べと病
スミチオン水和剤 40	800～1,000倍	収穫30日前まで / 2回以内	ブドウトラカミキリなど

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

※JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040